

永劫としなへなるそのまゝに

皆妙法のひびきあり。

あゝ、神境か靈境か

來れ人々法華經に

登れ人々身延山

共に集ふてそこしわの

救ひのみ親に跪き

報恩感謝の祈りせん。

## 思ひ出のまゝに

水郷の里にて  
間 宮 夢 覺

昔から佛の山に鬼が住むと云ひます。誰が云ひ始めたのでせうか、佛の山に住む人は悉く佛様のやうに尊いお方ばかりだと深く信じている人々が、あまりに矛盾多い生活を如實に見せつけられて遂に彼等を呪詛したのがこの言葉ではないでせうか、それだけ佛様の恩恵に多く浴し得る人々が、なせ鬼のやうなまるで正反對の生活をしなければならぬでせうか、私は私の得た經驗から思ひ出のまゝに筆を進めてみることにしました。

私が祖山に笈を負ふたのは大正七年の春でした、法喜堂の後の樺の木が新緑に色彩られていましたそれからあの樺の葉が落ち芽を出して又落ちて……同じ變化を八度くりかへしました、そして私共は思ひ出多い延嶽に最後の袂別をおしまねばならなくされてしまひました。

法燈ゆらぐ祖師の前に最後の法味をさくげた時、朝夕跪いた祖師の御靈屋、住みなれた我が學舎、そして見なれ聞きなれた山川草木の總てと、永遠に別れて行かねばならないのかしら、と思ふと胸底よりこみあげて来る云ひ知れぬ涙をどうする事も出来ませんでした。斯うした思ひは、おそらく私人ではなかつたでせう、級友の誰もがやはり同じ涙にむせんだであらう、否、卒業して行つた人も、卒業して行く人の誰もがやはり同じ涙にぬるゝであらう。不平も蟠もない、たゞ不知不識に落ちる涙、淋しいとか、悲しいとか、戀しいとか云ふ總てを超越した涙、有難いとか、忝ないとか云ふ形容はとてめてぬるゝ未だく深刻の涙に……。何事のおはしますかは知らねどもたゞ有難さに涙こぼるゝと歌はれた故人の境地も窺ひ知られるやうに思はれました。

過去に於てそれほごまで感涙にむせんだ事のない私が、なせこんなに泣かなければならぬだらうか、泣かさねなければならぬだらうか、それはあまりに佛様のお慈悲の大きさに甘へすぎたからだ、馴れきつてしまつたからだ、甘へすぎるもの、馴れきつてしまふものは、往々にして中毒に侵されて信仰意識が攪亂してしまふものだ、そして遂には惡道の中に墮ちてしまふのだ。佛様がお示し下され

た御言葉、佛様が常に世に生きてゐると思ふと、汝等は佛の無量深遠の慈悲になれて憍恣の心を生ずるであらう、そして汝等は遂には憶想妄見の網の中に入るであらうと、私は深く味ふ事が出来ました。佛の山に住む奴ばかりではない、多くの人々はランプや電氣に感謝する事を知つてゐるが、お日様に合掌する事を知らない、一錢二錢の恩恵に涙する事を知つてゐても、自分の心に糧を與へて下さる人格者にはともすれば心附かない。免疫素の欠乏している私共はあまりに早く馴れきつてしまふ、あまりに早く中毒にかゝり易い。

甘へすぎ馴れきつてしまふと、私共は往々にして不平不満を抱き蟠ある生活を送らねばならない。佛様が凡夫の顛倒せるとも狂ふとも云はれた、あまりに甘へすぎあまりに馴れきつてしまふと、お慈悲もみ教もふみにじつて全く狂人となつてしまふ、反叛者となり謀叛人となつてしまふ、父母の恩にあまりに馴れきつてしまふと却つて悪心を起して其の父母を殺すものすらある、主君の恩にあまり甘へすぎると却つて主君を罵倒し危害を加へんとする。

社會主義者が色々の理論の衣に自己のみにくい姿を包んで國家を毒してゐるのも、彼等は國恩に甘へ君恩に馴れすぎ毒に侵されて、身心共に麻痺した結果であらう。勞働問題も小作問題もみんなそんなやうな氣がする。

我等はみ佛のお慈悲に感激しなければならぬ、恩寵の生活を深く味識しなければならぬ、そし

て馴れきつてしまつてはならない、甘へ過ぎてはならない。

みちのくや筑紫のはてにかへるこも

折りくめてよ久遠の月影

これは高田教頭先生が私共の卒業の折、詠んで下された歌です。

自分は一人今叡山に在つてそして鷺のみ山に合掌しつゝ、四明山上高く止觀の月を仰いでゐます。みちのくや筑紫のはてに歸られた級友も、みんな鷺のみ山に合掌しつゝ恩寵の生活を送つてゐる事です。

一九二八、九、九

私が延山を去る瞬間に得た體驗を認めました、意を盡す事が出来ないのが残念です。

## 本妙律師を慕ひて

三 木 淨 達

會て私は醒悟園叢書を讀んだ。それは本妙律師の遺編として、書簡類を集めたものであつた。初め何の氣なしに讀んで行つたが、だんく尊い本妙律師の靈格に觸れ、果ては涙と共に武者振り讀んだ。